

---

# 同期

SHIRO

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

同期

### 【ZINEード】

N8203X

### 【作者名】

SHIRO

### 【あらすじ】

「一之瀬は関本がないと何もできないのか？」

切っ掛けは同期のこの一言。普段穏やかなこの同期が何故だか苛立つた様子で僕にそんな事を言った。僕と関本と工藤は同期で、付き合いだつて三年もある親友同士。いまさらそんな事を言われるとも思つていなかつた同期の思いがけない言葉に戸惑いを覚えるが、おまけに「一之瀬のことが好きかもしれない」と告白までされた。平穏な僕の日常がその事を切っ掛けに少しづつ変貌を遂げる。

同期の告白は行き過ぎた友情なのか？悩んだ末に僕が辿り着く先は

...

## 1 (前書き)

ボーグラブと書つ括りにはしたくなかったのですが、同性に告白されると書つことで言えばそななるのかな……一応R-15指定にはしてみましたがそんな際どい描写はない予定です。

「一之瀬は関本がいないと何もできないのか?」  
キッカケは同期のこの一言だった。

普段はあまり感情を表に出さない、どちらかと言つと穂やかな同期が、この時は珍しく苛立つた様子で僕にそんな事を言った。

それまでの話の流れを考えて、同期が腹をたてるような事を言つた覚えもなかつたし、いくら考えなしに思つた事を口にする性質の僕だったとしても、あの時何が同期をあれほどまでに刺激したのかも分からなかつた。

勿論同期だつて人間だから、虫の居所が悪い時もある。三年も付き合つていれば、何度か『こいつ、今怒つているな』と思つような場面にも遭遇している。

だけどこの同期に限つては、相手がそれを嗅ぎ取つた途端、実にさりげなくその場の空気を修正する事ができる男だった。

だからあの時の同期の言動には違和感があつて、苛立ちを隠そうともしない事や、なんだかそんな自分に戸惑つてさえいる様子が、僕には随分奇異に映つた。

#### 関本と工藤。

僕とこの二人は同期の入社で、最初の導入研修のチーム別けの時から一緒に、不思議と氣の合う二人だつた。何十人といふ同期の中で、同じチームから揃つて同じ営業部へ配属ともなれば、なんだかそれだけでも運命的な出会いのように感じたものだ。

僕と関本が営業一課で、工藤が営業一課。

課は違つていても同じ営業部でフロアも同じだから、お互いに顔を上げれば視界にその存在を確認できると言つ身近さだつた。

愚痴を言い合つたり、落ち込んだ時には励ましあつたり、それこそ最初のうちには昼も夜も三人で過ごしていた。社会人になって、多

分あの頃が一番楽しかった時代だと思う。

三年経つた今でも以前ほどではないにしろ、休みの前に三人で飲んで帰る事は頻繁にあるし、今でも困った時はお互いに助け合える仲間だ。特に僕は行き詰ると、必ずこの二人の同期に相談をする。大人になつてから自分の弱い部分を曝け出すのは幾分勇気もいるが、この二人は絶妙な距離感と的確なアドバイスで、僕の一番の相談相手になつてくれる。社会に出て、こう言う友人を持てたと言う事は、僕にとつては何よりの財産に違いない。

確かに、学生時代にも友人は沢山いた。

小学校時代には小学校時代の友人。中学、高校、大学と。

今でもそのうちの何人かは、たまに会つて食事ぐらいはする。ただ、環境が変わるためにつれて、以前の友人とは少しづつ疎遠になつて行く。

同じ年齢で同じ時代背景を生き、始めて社会に出て味わう現実の厳しさや苦労を共感できる同世代の友人との出会いは、これが最後の機会になるだろう。だから、尙更この二人の同期をこれからも大切にしたいと思つていた。

まず、この二人について、僕は特に分け隔てをすることなく付き合つて来たと思う。どちらかがより気が合うとか、どちらかのこう言うところが嫌いだともなかつた。ただ、関本との接点が多いのは確かだ。

同じ課で机が隣同士と言うのもあるが、僕らは同じマンションの7階と4階に住んでいる。特に示し合わせたわけでもなく、会社から紹介された不動産会社の物件の一つが、利便性と立地条件と、2Kの新築と言いつつない好物件で、偶然二人の目が留つたと言うだけだ。

住まいが同じだと、出くわす機会は必然的に多くなる。

朝、マンションのエレベーターで顔を合わせるのは、ほぼ毎日。

特に待ち合わせをしているわけではないが、始業時間が同じだから

早朝出勤とかフレックスでもない限り、自ずと朝の行動パターンは同じになる。

僕は、朝の情報番組の『今日の占い』を見てから家を出るが、関本は『今日の占い』の前に家を出るらしい。タイミングとしたら、丁度エレベーターで出会つ頃合いだ。

会社に着いたら着いたで、机は隣同士。

だから、仕事以外の雑談で盛り上がる事も多い。むしろ、そっちの方が多いかもしれない。それに机を並べているとお互いの仕事の進捗状況も分かつてくるから、終わりそうならどちらともなく声を掛け一緒に帰る。一人ともまだ気儘な独身生活だし、そのまま晩飯を食べるなんて日課のようなものだ。

特に意識してそうしているつもりはないが、いつの間にか関本と過ごす時間が多くなつていて。近頃ではほとんどが関本と一人でいるか、たまにそこに工藤が加わると言つパターンが、定着化していった。

そんな状況だつたからこそ、あの時工藤に「今晚、飯でも行かな  
いか」と誘われて、「構わないけど、関本の方はどうかな」と、僕  
は当然の如く『関本』の名前を口にしていたわけだ。

「関本か」

確かに、そう言つたきり工藤は黙り込んだ。

僕はその時会議の資料作成をしていて、そちらに気を取られてい  
たから、その前の会話もほとんど生返事で、『関本か』と言つたき  
りの工藤の言葉も、軽く聞き流していた。

それにもなんとか長い沈黙じゃないかと気付いた僕は、そこ  
でやつと顔を上げて画面越しに工藤を見たような状況だった。

「関本がどうかしたのか？」

不思議そうに尋ねる僕を、まるで待ち構えていたようなタイミング  
で、工藤はあの一言を放つた。

「之瀬は関本がないと何もできないのか？」

まさか同期からの思いがけない言葉だった。

そんな事を言われるとは思つてもいなかつた僕は、正直などこり呆気に取られた。

「だつて、いつも二人だろ?」「うう

まるで小学生のような台詞を言つて、僕は唇を尖らせた。

普段それほど感情を現さない工藤にしては珍しく、その顔に苛立ちさえ見えるから、僕はますます混乱した。

「俺が誘うと、必ず関本つて言つんだな」

少し早口で冷めたもの言いをする。こう言つ時の彼は何かに腹を立てている時だ。三年の付き合いで僕もそれ位は分かっている。ただ、彼が腹を立てる理由が分からなかつた。

だから、僕は余計に焦ることになる。

何が気に食わないのか?

関本がいたら都合の悪いことでもあるのか?

それならそれで、「一々瀬に折り入つて話がある」とか、誘い方ならいくらでもあるはず。

それともそれまでの会話で、僕が彼を怒らせるような態度を取つたり、そう言つた発言をしたりしたのだろうか?

確かに、熱心に彼の話に耳を傾けていたわけではなかつたけれど、仕事中の雑談なんてそう言うものだと思う。

よっぽど虫の居所でも悪かつたのもしれない。

いや、彼に限つて理由なく他人にハつ当たりをするなんて尙更考えられない。

彼は僕と違つて、遙かに人間ができるている。

だとしたら他に思いつく理由はなんだつて言つんだ!?

たとえば頼りない僕が身近な存在を良い事に、関本になんでも頼る傾向にあるのが、同じ同期としてはいかがなものかと、常々思つていたりするのかもしれない。

それなら多少なりとも心当たりがある。

居直る訳ではないが、僕の頼りないのは今に始まつた事じゃない。

三年の付き合いなら、今更それに腹を立てるなんてよっぽど可笑しい。

僕はその時考え出せる理由を、ああでもないこうでもないと、ぐるぐる考えながら工藤の苛立ちの原因を探ろうとしていた。

そんな僕の困った様子に、工藤はふと我に返ったようだった。

「ごめん、牽制されてるのかと思って」

これまた訳の分からぬ事を言つて、余計に僕を混乱に陥れた。僕が工藤を牽制しなければならない理由がない。

いつたい何に対する牽制と言つのだろ。

こいつ、『牽制』って言葉の使用方法を間違つてやしないか？  
問い合わせをする僕の前で、工藤は一瞬だけ不安な顔をした。多分、そんな彼を見たのは始めてで、僕はこの状況に戸惑つた。

「牽制つてどう言つ意味だよ」

そして、僕は素直にそう訪ねていた。

工藤は少し考えた風に僕の顔をじっと見ると、困ったような眼をして撲に言つた。

「気にするな」

そう言われて納得できるか？

僕は、大いに気になつたし気持ちも悪い。

だが彼はそのまま決まりが悪そうに黙り込むから、僕は僕で勝手にこう推測してみた。

確かに、近頃は工藤と過ごす時間が少なくなつて、自分が、彼の立場だったらどうだろうか。同じように三人で友情を分かれ合つているつもりでも、どちらか一方に比重が傾いたら、どこかに嫉妬のようなものを感じるのは、何となくだけ理解できる。

僕らの付き合いに、『嫉妬』という温っぽい言葉が適切だとは思わないが、工藤はどこかに少なからず、『疎外感』のようなものを抱いているのかもしれない。

そんな風に考えてみると、なんとなく解決策も見えてくる気がし

た。それこそ単純な撲は、急に工藤に優しくすればいいんだと思いつたわけだ。

「関本と一緒にじゃなきゃ嫌だつて言つてないだろ。別に一人でもいいよ」

これは我ながらまことに言つた。その証拠に、工藤から帰ってきた返答は、「無理にとは言つてない」と、冷ややかなものだった。

考えたら、随分傲慢な言い方だつたかもしれない。

考えなしに口にするこの性分が恨めしくなつた。ましてやこんな時、この場を諫めるほど撲には氣の利いた台詞も浮かばないし、結局どうしていいのか分からなかつた。

「無理つてなんだよ」

変に意固地になつて、ますます状況を悪化させるような事しか言えない。

困つた僕は、ふくれ面でパソコンの画面を見つめる。  
もちろんそこに答えが書いてあるわけでもないから、マウスを意味なくクルクル廻してみたりする。

工藤はそんな僕の態度があまりに子供っぽく見えたのか、微かに笑つた。そのことで、張りつめた空気が穏やかに揺れるのを感じた。画面から顔を上げて工藤を伺つ。そこには見慣れた、いつもの工藤の顔があつた。

「ごめんー之瀬、俺の言つ方が悪かつた。機嫌なおしてくれるか」  
結局は工藤からの謝罪を聞くことになる。何時の時でも、彼はさり気なく僕が負担にならないような気配りをみせる。そう言つてころに甘えているのだとは思つけど、僕はそれだけでホッとできる。

「ー之瀬、何時なら終われそんなんだ」と、優しく僕を促がした。

薄つすらと笑みを浮かべた工藤の口元を見つめながら、抱えている仕事の算段をする。

「七時ぐらいかな、多分」

「分かった、空けといてくれ」

そのまま工藤は軽く手を上げて席を離れる。残された僕は、なん  
だかスッキリとしないままその後姿を眼で追っていた。

結局のところ、これは一人で食事に行くつてことだらうな。  
どうも引っかかる。

何かあるのか？

今思うとあれは第六感とまでは言わなくとも、この夜がどこか特  
別なものになりそつな、そんな予感めいたものが確かに存在してい  
た。

だからって、あんな事が僕を待ちうけていようとは。  
絶対、絶対、この時点で想像出来ないつて！

自慢ではないが、僕は嘘が下手だ。

「一之瀬、ナニ食いたい？」

今日が給料をもらつたばかりの金曜日だつた事もあり、関本は当然の如く撲が断らないと言う前提の下、今晚の腹具合を聞いてくる。あの時の一件さえなければ、「今日は豪華に焼肉にするか?」じゃ、工藤にも声をかけとくよ」と、言うのが何時ものパターン。

でも、なんだか一人で行く事にあれほど拘つた工藤の手前、関本にはそれが言い出せなかつた。咄嗟にやつたことが、止せばいいのに日頃吐きなれてない嘘を吐くことだつた。

「ごめん、今日はちょっと

「なんかあつたのか?」

関本は気遣うように僕を見た。

誘われて断るなんて滅多にないから、仕事絡みで何かあるのかと余計な心配まで掛けさせたようだ。嘘をつくのは心が痛い。

「違うんだ。大学の友達と……久しぶりに飯でもつて話になつて」

なんだかソワソワとして、変な汗を搔きそうになる。

関本は勘が鋭いから、一瞬胡乱な眼つきをした。

生きた心地がしないとはこう言うことか。

でも、そこは僕と違つて大人の彼は、「そつか、それじゃしかたないな。愉しんで来いよ」となにやら含んだような笑みで、案外あつさりと無罪放免してくれた。

第一段階はクリア。

僕に断られた関本は、当然の如くもう一人の同期を誘いに行く。工藤の席も、僕の所から見渡せる位置にあるから、その様子が逐一見て取れる。

残念ながら話の内容までは聞こえて来ないが、嘘をついている

身としては、内心ドキドキもので、こっそりと一人の動向を伺つたりする。

なにやら楽しげに笑つている一人。

工藤が一度だけ僕の方をチラリと見た。  
言つてないよ、関本には。

ちょっと恨みがましい眼で工藤を睨む。

暫くして、「ええ、あいつにもフランクしたよ」と、関本が肩を落として戻つて来た。

そうか、工藤も言わなかつたんだ。

なんだろう、このコソコソとした感じは。

これではまるで、社内恋愛みたいじやないか。

一瞬、そんな風に考えた自分が馬鹿みたいに思えた。取敢えず工藤と二人で行くのは決まつたとして、約束の時間までに火曜の会議資料作成に頭をシフトする。出来なければ、休日出勤は免れない。仕事の遅い僕は焦る、慌てる、そして行き詰まる。

金曜日の夜ともなると、定時で潮が引くよつにほとんどの社員が退社した。暫くは時間ばかりが気になつて、チラチラと時計を窺つていた僕も、何時間にか作業に没頭していたようで、結局は、突然鳴り出した携帯電話に、約束の時間を突き付けられた。

机に放り出していた携帯電話の震動は、小心者の僕を驚かせるには十分過ぎるほど破壊力があり、慌てふためきすぐさまそれに飛びついた。

「もしもし」

周りを憚るように、声を潜める。なんと言つても隣の席に、油断のならない関本がまだ残つていた。関本の奴、さつさと定時ダッシュをするかと思いきや、今晚のお相手を調達したようで、時間繋ぎかなんだかしらなが、急ぎでもない報告書なんて書いている。不器用な僕が、ここからさつ氣なく脱出できる確率はかなり低い。

『一之瀬』

工藤の柔らかい声が聞こえた。咄嗟に関本を見てしまつて、慌てて顔を背ける。怪しいことこの上ない態度に関本の視線が突き刺される。

そう言えば、あいつ、どうした？

慌ててフロアを見渡すと、既に工藤の姿は何所にもない。いつもなら一声掛けで帰るはずなのに、鮮やかに姿を消している。すでに居なくなつた工藤の席辺りを睨み、壁の時計に目をやる。約束の時間は十分ほど過ぎていた。

『出れそうか？』

工藤の気遣うよつな声がした。

「ああ、ちょっと待てよ」

慌てて席から立ち上がり、作りかけの書類を保存しつつ、忙しく帰り仕度を始める。

「今、パソコン落としてる」

仕事は結局未完成のままだ。

火曜の会議までに間に合ひそうにない。休日出勤は確定だろうな。

「やつとく事あつたら言えよ。待ち合わせしてるんだろう」

携帯電話片手にバタバタと撤収中の僕に、親切心から関本が声をかけてくれた。

その声が工藤にも聞こえたのか、『関本も誘つたのか?』と、聞いて来た。いちいち反応しなくてもいいだろうに、僕はまたもや咄嗟に関本をチラリと見てしまう。

「いや、今何処?」

ちょっととぶつきら棒に答える。

工藤に場所を聞きながら、僕の様子を伺う関本には大丈夫だと手の平を見せた。

僕は携帯を肩に挟み、鞄の中に煙草とライターを放り込む。過ぎてしまつた時計を睨みながら、上着に袖を通して、コート掛けから自分のコートを引っ掴み、机まで戻つて施錠をした。

携帯電話は既に切れていたが、関本から余計な事を言われないよう、そのまま耳にあてた状態で、怪訝な顔をした関本に『じゃあな』と、片手を上げて挨拶をして見せ、慌ただしく部屋を飛び出しど、Hレベーターに向かつて一目散に走り出していた。

『脱出作戦』なんとかクリア。

工藤が待ち合わせに指定した場所は、会社の傍にある小さな公園だった。位置的には会社の真裏にあり、正面玄関とも社員通用口とも接していない為、僕の意識の中にはその存在 자체がほとんどないような場所だった。もちろん入社して3年にもなるが、僕は一度も足を踏み入れた事さえなかつた。

どこか先に行つて、店で待つていてくれたほうがこっちも随分気が楽なのに、工藤はなんだつてそんな場所を選んだのか。

「コードのポケットに携帯電話を握りしめたまま、僕は足早にエレベーターを降りる。

でもよく考えると、金曜の夜なら会社の近くの飲み屋は、社内の人間が誰か一人ぐらいは席を温めている。むしろ逆方向にあるこの公園は、案外隠れた待ち合わせ場所かもしれない。

そんな事を考えながら、社員通用口を出て駅の方角へ歩いていた。会社の前の道は、車道からひとつ中に入った筋にあり、駅へ向かう場合は一つ目の角を左に曲がつて通りに出るか、このまま突っ切つてから広い通りから駅へと向かう。

今夜は右に逸れて待ち合わせの公園を目指している。後ろを振り返つて、誰かいいかを確かめるほどの念の入れようだ。

同期との待ち合わせに、何を警戒しているんだろう。

日頃吐きなれてない嘘をつくと、小心者の僕はそれだけでも十分拳動不審人物になれる。

見慣れない夜の道は人通りがなくて、公園の入口付近は僕の背丈ぐらいの植栽がS字を描くように植えられている。外灯も心もとないし、なんとも薄気味が悪い。陰から誰か飛び出しでもしたら、僕は間違ひなく腰を抜かすだろう。

くねつた植栽を抜けると広場に出る。一旦中に入ると、どこにで

もあるよくなすつきりとした公園で、僕は難なく工藤を見つけることができた。

大きな樹の下にベンチが3つ。

右端の一番明るい外灯の下に同期がいた。

彼は鞄を机にして本を広げて読んでいるようだった。

「眼、悪くなるぞ」

遅れて行つたわりには、僕はゆっくりと近付いて声を掛けた。

「上手く抜け出せたんだな」

そう言つて、少し眼を細めて僕を見上げる。そんな工藤の顔は寒さのせいか、どこか緊張したような顔つきだ。何を読んでいるのか覗き込もうとする前に、本がパタリと閉じられた。

工藤はそのまま鞄に突つ込むと、「行くか」と言つてそつとなく立ち上がつた。

僕も早くここから離れたいと言つ氣持に捉われていた。別に会社の近くで、同期と一緒にいるところを誰かに目撃されたとしても、それ自体には何の問題もない。ただ、関本に嘘をついたと言つ事實が、僕を後ろめたい気持ちにさせていた。

「ちょっと歩くけどいいか」

僕よりすらりと背の高い工藤が、先に歩きながら振り返る。

「何処に行くんだよ。俺の知つてるところか?」

その背中に問い合わせて、僕は彼の後に従う。

「三人で行つたことはなかつたと思うが」

工藤はそう言つたきりしゃべらない。

なんだかこつち言つパターンは初めてで、どこか違和感がある。

だいたい三人で飲んで帰る時は、ほとんどが会社と駅までの間にある往きつけの店で、その日の気分でどちらに決める。まず、駅の反対側へ足を延ばすと言つ選択肢がない。それに今夜は見慣れない景色と、何処か様子の違う工藤と、嘘まで吐いて待ち合わせた事に対する罪悪感に、僕はたぶん戸惑つていた。こんな状況は今までなかつたし、どうにも落ち着かない。

この漠然とした落ち着かなさの正体の一つが、彼に対する警戒心の現れである事には間違ひなかつた。昼間の態度からして変だつたし、今もどこか違つた空氣を纏つてゐる。

「関本に何つて言った」

僕があんまり黙り込んでゐるから、工藤はちよつとからかうような目で振り返つた。

「おまえがあんな事言つからだろ?」

僕の方は、恨めしい眼で工藤を見る。

「嘘ついたのか」

工藤が意地の悪い事を言つ。

「だつてさ」

焦つた僕の姿を思い出し、罪悪感で気分が落ち込む。

「悪かつたな。言えば良かつたのに」

工藤は笑いながら僕を見た。

「よく言つぜ。関本抜きじや飯も食えないみたいにおまえが言つからだろ?」

「一之瀬は、関本に一人で行くつて言えないんだろうな

「そうだよ、と僕は内心毒づいていた。

「そう言つおまえだつて、俺と行くつて言わなかつたんだろう?」

「先約があるとは言つたが、誰とまでは聞かれなかつた。別に嘘はついてない」

涼しい顔で工藤が笑う。

そうか、こいつは元々そう言つ奴だつた。いつだつて、焦つたり慌てたりすることなんてない男だ。

「するいぞ、おまえ」

僕は子供みたいに不貞腐れた。

僕は工藤に恐らく一駅以上はある距離を歩かされ、待ち合わせの公園よりは随分と大きな公園の傍の、お洒落なイタリアンの店へと連れて行かれた。普段なら会社近くの縄暖簾の居酒屋か、ちょっと小汚いぐらいの中華屋だったりするのに、およそ男同士で入るには無用に洗練され過ぎた店構えで、慣れない僕は緊張気味だった。用意がいいと言うか、こう言う店なら当然なのか、工藤は前もつて予約を入れていたらしく、名前を告げると、にこやかな笑みと共に奥のテーブルへと案内された。

「何、飲む？ ワインもあるけど」

メニューを広げて僕に勧める工藤を尻目に、よく見もせず一言で片づけた。

「取り敢えず、ビール」

会社帰りのサラリーマンなら、取敢えずビールは基本だ。僕は聞くまでも無いと呟き顔で言い放った。

そんな僕に呆れるような笑みを零し、工藤は僕のビールと、なにやら自分の為に別のものをオーダー。

暫くすると僕の前には、いつもの居酒屋なんかのドッシリとしたジョッキではなく、綺麗な曲線を描いたグラスが音もせずに静かに置かれた。それは同じビールとは思えないほど、よそ行きの顔をしていた。

工藤の前には、泡は泡でもグラスの中を優雅に立ち上る、纖細で細長い首をしたシャンパングラスだ。

こいつ、こんなにお洒落なモノを飲むんだ、と改めて目の前に座る男をまじまじと見つめた。

「ここ」、トリップパがお勧め。それと海老が名物だよ

慣れた仕草でメニューを指差すところをみると、どうやら初めて入った店ではないらしい。

「トリッパ？」

「そんなお洒落なものは聞いたことも、食べたこともない。

「内臓系だよ」

そつち系の物は、「じとじ」とく苦手な僕は渋い顔をする。

「まあ、騙されたと思って食べてみる」

「嫌だよ。大概騙されるから」

「子供だな」

工藤は笑つて、呆れるような目で僕を見る。

オーダーは全て工藤に任せて、僕らは「お疲れ様」と、グラスを含わせた。

オヤジ臭く、「ふは～」と言わないだけましだつたが、僕は一日の労を労つよに、ご褒美のビールを一気に半分ほど流し込んだ。サラリーマンになってこの一瞬が至福の時だ。

いつからだろうな、ビールが美味しいなんて思えるようになつたのは。この苦みを美味しいと思えるようになつたと言う事は、僕も立派な大人つてことだろつ。

工藤はそんな僕を眺めながら、いかにも優雅な仕草でグラスに口を付けた。折れそうで纖細なグラスが、お洒落な工藤にはよく似合つている。

「いいとこ知つてるんだな、よく来るのか？」

僕は珍しいものでも見るようになりを見回す。

こげ茶色に統一されたインテリアはほつとするぐらい落ち着けるし、趣味の良い音楽は煩過ぎず、静か過ぎず、薄いピンク色のテーブルクロスは清潔でシミ一つない。

周りはカツプルか、女の子同士のグループ。

上手に他の客が目に入らないように配された観葉植物が、ゲストだけの空間を巧みに演出していて、その心憎さに感心した。

「誰と来たのか白状しろ」

僕はニヤニヤと工藤を見る。

「ランチで入つたら安くて結構いけるし、夜もなかなか良かつたか

らね

そんな事は聞いていない。夜にこんな所に一人で来るものか、と僕は好奇心丸出しの顔をする。

「気になるか

彼は優雅に笑つて、眼の高さに上げたグラス越しに撲を見る。そんな気障っぽい仕草も不思議と似合うから、男前はズルイ。

「そりやあな。おまえあんまり言わないから」

僕も男だから女性と二人で食事ぐらいはしたことがある。だけど社会人になつてから、特に彼女と呼べる存在はいないし、どこか仕事を手一杯だ。そんな暇がないと言つたらモテない男の言い訳だと言われるかもしれないが、その上まずい事に、最近ではそれ自体に何も不都合を感じないから、ますますもつて縁遠くなつてしまつ。こんな事でいいのか二十五歳。

もう一人の同期の関本だつて、顔も頭も良いし仕事もできる。女性にはかなりモテると思うけど、あいつも特定の彼女が居るとは聞いていない。尤も水面下で、こつそりと付き合つているとも考えられるが、同じマンションに住んでいて、その気配を感じさせないと言つ事は、現在進行形がないと言つことじやないだろうか。ただ、撲はその辺の勘は全く鋭くない。

眼の前の工藤はどうだろう。こいつも関本とは違つたタイプの男前だ。

関本が行動力のあるリーダータイプの男だとしたら、工藤は頭脳明晰な研究者タイプ。外見だつて男性ファッション誌のモデル並みのスタイルをしているし、何事に描いてもセンスが良い。そんな奴がモテないわけないとつぶが、工藤は自分の色恋を誰かに喋るタイプの男ではなかつたし、他人に目撃されるなんてへマもしない。

「取引先の子と一度ね」

今もそう言つて、謎めいた笑みを浮かべている。

そう言えど、この男はあんまり声を上げて豪快に笑わない。改めて一人で向き合い、そんな事に今さらながら気がついた。

最初こそ緊張もしていたが、勧められるままにワインなんかに手を出し、僕は工藤相手に会社の愚痴や上司の悪口、果ては社内の噂話を喋り倒していた。

男の喋りはみつともない。それは重々承知している。

でも、仕方ないじゃないか、こいつほとんど喋らないんだから。三人でいる時は、関本が僕らの会話を上手くリードしてくれる。工藤も口下手ではないはずなのに、今夜の同期は、やはりどこか何時もとは違う空気を漂わせていた。

僕の話に耳を傾け、適当なところで相槌を打ち、笑ってさえくれるのに、どこか上の空で片方の脳でなにかを考えている。

だから僕は余計にはしゃいでみせた。

なんだか不安で落ち着かないんだよ。

そんな事を思った時、工藤が意を決したかのように両肘をついて、少し身を乗り出した。

「一之瀬」

囁くように僕の名前を口にした。

彼はどうやらかと言うとあまり大きな声で話をしないが、不思議と耳に馴染むような話し方をする。

僕はと言つと、はしゃぎついでに騙されるつもりでトリッパを口に放り込んだところだった。

ぐにやりとする触感に、少し情けない顔をしてみせた。

そんな僕にはお構いなしに、工藤は少しだけ躊躇つてから静かに言つた。

「どうも一之瀬の事が好きみたいなんだ」

その時の僕は、彼の言葉の意味がよく分からなかつた。

得体のしれないトリッパが、既に口の中で拒絶反応を起こしかけていたと言つものもある。吐き出すこともできないし、租借するのも気持ちが悪かつた。

彼は今なんて言つたんだ?

確か好きとかなんとか……

好きってどう言つ意味だよ。

ぐるぐる廻る思考に焦つて、僕は取り敢えずトリッパと彼の言葉を一緒に呑み込んだ。

「大丈夫か?」

涙目の僕を気遣うように工藤が僕の顔を覗く。

大丈夫かつて、トリッパの事か、それともおまえのその言葉の方か。

ワインを促がされたところをみると、僕のトリッパ初体験を心配しているようだ。やつてはいけない事だと思うけど、僕は口の中を濯ぐような下品な飲み方でワインを流し込んだ。

「やつぱり気持ち悪いか?」

この場合、どっちとも取れる言い方だ。僕は少し苛立つた。

「さつきから、どう言つ意味だよ」

工藤は声を立てずに笑う。

「そうだよな。好きなんて言われたら困るか、やつぱり」「

そつち

軽い眩暈をえ覚えるが、これはワインのせいばかりでもなさそうだ。

そりやあ、困るだらつ。男に好きって言われても。

いや待て、待て……好きにも種類がある。早とちりの僕が、何か大きな勘違いをしている可能性だつてある。ここで変に大騒ぎして、

後で恥をかくのもバツが悪い。

もう一度確認してみよ。

「好き」で、友達としていたんだろ？」

当然そうだと確認する恐る工藤を窺っていた。

好きな先輩とか、好きな先生とか、好きな食べ物とか、一般的な子供を表す子を「男」って言つれてら辺る必要はない！

せうとせうひまつせうだよな。

といふが工藤は、少し困った顔をする。

「俺の好きはそう言つた好きとは違つ気がする」

と  
来た。

「では、おわかのかな?」  
「ううん、そんなのないよ。」

ていいのか分からぬ。

おまへと待つてくれ

取敢えず落ち着いてくれと言いたかったが、焦っているのは僕だけで、同期は全く冷静そのものだった。

こんな場合、器用な人間ならお酒も入つていいことだし、酔つているのを良い事に、上手くはぐらかせたのかもしれない。それこそ頭の良い同期なら、不器用な奴がなんだか誤魔化そうとしているのは直ぐに見抜けるだらうし、そつと引き返す事ぐらい訳ない事だ。

ただその夜の僕は、日頃飲み慣れてないワインの所為もあり、いつになく気が大きくなっていた。最初こそ同期の告白に焦つていたものの、それなら彼の言う好きが何なのか、その正体を突き止めようなんて、今にして思えばかなり無謀な挑戦をしていたわけだ。これは怖いもの見たさなのか、好奇心なのか、闇雲に藪の中を突ついているようなものだつた。

それに彼は掛け替えのない同期の一人であり、もしも彼が異性を

好きになるような感情で僕に告白したのだとしたら、それ相当の覚悟のいることだろうし、そんな想いを頭ごなしに拒否するほど、僕は非道な人間でもない。少なくとも、彼がそう思うに至った経緯ぐらいは、聞いてあげられる懐の深さはあるつもりだ。

「友達の好きじゃないなら何なんだ？」

工藤は煙草を取り出す。ゆっくりとした動作で指に挟むが火を点ける素振りはない。

彼は彼で、思わず口走った自分の『好き』の正体を推し量つているのだとthoughtた。

「一之瀬と関本が仲良くするのをどこか快く思わない自分がいるんだ。嫉妬だろうな。そういうのって友達の好きにはないだろう？」

同期にしては珍しく、その言葉に迷いがある。

答えになつてているのか分からなければ、僕は撲で、できるだけ彼の好きを修正しようと試みていた。

「友達同士でも嫉妬や独占欲はあるだろう。そんなに特別な感情と思わなくともいいんじゃないのか」

この時の僕は好きと言つ言葉の正体を突き止める事に夢中で、それが自分自身に向けられている感情だと言つ実感が、酔いと共に薄れていった。

工藤は考える。

煙草は相変わらず指に挟んだまま。

僕は何故だかその指先ばかりを見つめていた。

「俺はね、一之瀬に触れてみたいんだ」

その一言で僕の心臓は飛び上がった。突つついた藪から蛇が出た。彼の好きの正体が、いきなり現実味を帯びて僕に迫つて来る。同性愛、ホモ、ゲイ。

どれも自分で口にするのは憚られる言葉が頭の中を駆け巡った。

「工藤、おまえってそうなのか？」

僕はこの曖昧で微妙な言い回しで、その言葉を逃げ切った。

ここに来て、どうやら僕は要らぬところを突き詰めてしまったよ

うだと、この時になつて自分の失態に気が付いた。そんな僕の動搖に、工藤が笑う。

「別に男が好きなわけじゃない。これまで、一度だってそんな事はなかつた。一之瀬だから好きなんだ。分かるか？」

いや、分からん。

男を好きなわけじゃないと言われて、「そつか、それなら良かつた」と、安心できる状況でもなさそうだ。男を好きな性癖でもない同期が、男の僕を好きだと言う感情が、今一つ分からない。少し行き過ぎた友情なのか、それとも同期は僕に対してだけ同性愛的な感情に目覚めたとでも言つのだろうか。果たしてそんな限定付きの同性愛が存在するのか？

「おまえさ、いつからそんな風に考えていたわけ」

僕は三年間の彼との付き合いを振り返りながら、そう聞いてみた。確かに撲は色恋に關して言えば鈍い方かもしない。でも、これまでの付き合いで、彼が必要以上に撲を見つめたり、それとなく撲に触れたりする事はなかつたと思う。普通、なんとなくだけど、相手が好意をもつてしているのは分かるものだ。この場合、相手が同性であつたから、僕はそのサインを見逃していたのか？

工藤だってもともと同性愛者でもないのに、どうして男の僕を好きだなんて思いはじめたんだろう。僕の中に、彼にそんな衝動を起させれるような何かが存在でもするのか？

考え出したら分からぬ事だらけだ。

それにもしてもこれは彼らしくないやり方だ。仮に彼が異性に感じるような感情を僕に持ち合わせていたとして、いきなり僕に告白までするだらうか？

この告白は相當に勇気がいる。はつきり拒絶されるとか、悪くしたら絶交されるとか、もしかしたら誰かに吹聴されるかもしないとか、そう言つたりスクだつて伴う。

頭の良い彼がそれを考へないわけがない。それとも、彼には僕なら告白しても大丈夫だと思えるような、勝算があるのだろうか？

焦る僕とは対照的に、同期は少しも動じない様子で僕を見ている。身の置き場のないような状態に、僕は取敢えず落ち着こうと煙草を取り出した。口に銜えてライターを捲すが、動搖からか直には見つからない。鞄やジャケットのポケットを必死で探る。

そんな僕に工藤の手が伸びた。今の僕は、それだけでも十分脅威だった。

ヒヤリと凍りついたまま動けなくなる。

何のことはない、口に銜えた煙草の前にカチリとライターの火が灯つただけだ。僕はおつかなびっくりで、差し出されたライターに顔を近づけ、火をもらう。そんな僕を、工藤は黙つて見つめていた。指先がどうしても震えてしまう。

僕の25年的人生で、男に告白されるなんて初めてなんだ。これくらいの動搖は当然じゃないか。

工藤もやつと思い出したように、自分の煙草に火を点けた。

「いつからだるうな」

立ち上る煙草の煙を田で追いつつ工藤は囁く。

関本の際立つような通る声とは違つて、工藤はそつと囁くように話す。

いつかの飲み会の席で、工藤の声がセクシーだと女子社員が騒いでいたのを思い出す。耳元で囁かれたらグラッとする声だそうだ。

男の僕はグラッとは来ないが、状況が状況なだけに、どうしても口説かれているのではないかと錯覚する。いや、実際口説かれているわけだらうな、これは。

「もともと男が好きじゃないなら、いきなり男の俺を好きになつたりはしないだらう。俺、おまえになんかしたのか。どうしたらそんな風に思えるんだ」

焦つていた僕は、かなり感じの悪い言い方で彼を突き放そうとしていた。今や全力でこの場から逃げ出したい。

工藤は別に気にした風でもなく、相変わらず薄すらと笑いながら、思い出話でもするような遠い眼をして話しだした。

「一之瀬が関本つて口にする度、なんだらうな……自分でもどうじよつもなく心がザラつくんだ。俺はどうやら一之瀬を独占したいらしい。今日おまえを誘つた時、関本つて言つのに、自分でも驚くぐらうに嫉妬したんだ」

あの時の違和感がここで繋がつた。関本の名を口にした僕に、怒つたような素振りを見せた事情がやつと呑み込めた。

なるほどね。

そうは理解できても、これは落ち着いてはいられない状況だ。凡そ嫉妬と言つ言葉が似合いそうもないこの男が、ドロドロと僕への気持を吐き出す。僕は僕で、出来るだけ冷静さを装い、ここに至つてもまだどうやって工藤を説得しようかと、気持ちは後ずさりしながら考えていた。

「俺達、三人同期じゃないか。俺と関本が嫉妬するような関係じゃない事ぐらい、おまえだって分かるだろ?」

取敢えず、嫉妬される理由なんてないことを僕は必至に訴えていた。

「好きになるつて理屈じゃない。そんなに聞き分けの良い感情なら俺だつて悩まないさ」

ここまで言わされたら、工藤の好きが、もはや友情の範囲を超える好きであるとしか認めざる得ない。ただ、認める事はできても、それを受け入れるのは別の次元の話だ。

僕はここで、なんとしても工藤を説得しなければならない。

果たして僕にそんな芸当ができるのか?

ほとんど吸わないままの煙草から立ち上る煙を、じつと眼で追いながら僕は考える。

何も整理できないま、それでも僕は手探りで喋りだす。

「好きか嫌いかの二者択一なら、好きなんだと思つ

心なしか工藤が嬉しそうな顔をするから僕は慌てて先を急ぐ。

「だけど俺の好きはおまえが期待するような種類の好きとは違う。

俺にとつてはおまえも関本も同じように大切な存在で……どちらが

好きだとか、友情以上の感情とか、……そんなことは考えられないし、今の関係を崩したいとは思わない。もちろんどちらが好きとかも考えられない。もし、おまえが今の状況にどこかに疎外感を感じると言うのなら、出来る限りそれを埋めるような努力はする。今の俺には、これ以上の約束はできないし、おまえの期待には応えられないと思う」

少ない経験の上に、『男に告白される』なんて項目はないから、これで良いのか悪いのか全く分からない。今言えることはこれが全てで、これ以上は僕には考えられなかった。

意気地なしの僕はまともに同期の顔を見ることができず、手元の煙草を遊びながら相手の反応を静かに待つ。

「一之瀬」

こんな時に僕の名前を呼ぶのはずるい。

しかたなく僕が顔をあげると、薄っすらと笑みを浮かべた工藤が僕を見ている。特に悲観したふうでもなく、反対に気遣うような素振りさえある。

「一之瀬を困らせるつもりはないんだ」「もう十分困つていい。

そうとも言えない僕は煙草を口に運ぶ。

「一之瀬をどうこうしたいってわけじゃないんだ。でも、今までとは違うものが俺の中にあって……やっぱり、そういうのは困るか」

店内は適度に灯りが落ちていて、テーブルの上にはキャンドルグラスが揺らめいている。それなくとも、舞台効果は満点で、こんな話は大きな声ではできないから、声を潜めるように話す。少し身を乗り出し、気遣うように覗き込む視線が僕をますます落ち着かなくさせた。

僕が女だったら、工藤ほどの男にこんな風に告白されたら、すんなり頷いているじゃないだろうか。

「だから、こういうのは……」

それ以上、次に続く言葉が見出せない。彼を傷付けたくないと思

いつつ、僕をこんな状況に追い込んでいる事に少なからず苛立ちを感じるから、ここで何か口を開いたら取り返しのつかない言葉を發しゃうで、僕は何も言えなくなっていた。

僕らの前に沈黙の川が横たわる。

すっかり冷めきった料理が、精巧にできた蝶細工のように見えてくる。

トマトベースのあの妙な食べ物。

なんだっけ……。やう、トリッパだ。一度と食わない！

僕は考えることと会話を続けることをすっかり放棄して、田の前の料理をじっと見つめるしかなかつた。

気まずい沈黙を破つたのは工藤だった。

「弱つたな……。一々瀬にそんな顔をさせぬつもりで言つたんじゃないんだ」

工藤は困つたなと呟つくり、頬杖を突く。ちよつと考えるように視線を逸らしてから、灰皿の煙草を押し潰す。するい僕は、そんな工藤の次の言葉を静かに待つ。

微かにため息が聞こえた。

「ごめん、今日は聞かなかつた事にしてくれるか」

多分この状況で工藤に何が言えただろう。それでも僕はそんな工藤に腹を立てていた。

こんな爆弾発言を今更聞かなかつたことにどうれるか？

僕はそんな器用な男ではないし、明日から平氣で顔を合わせる自信もない。

そんなに簡単に取り消せるなら、告白する前にもつとよく考えろよ。

どうしてくれるんだ。

僕は明日からどんな顔しておまえと付き合えばいいんだよ。

それにおまえはこれで満足なのか？

明日から何もなかつたよつて、普通に友達として接することができのか？

そんなに簡単なものなのか？

何故だか言いたいことが沸々と沸き上がってきたが、これ以上深入りするのは危険だと僕の頭の中で半鐘が鳴っていた。僕は全てをそのまま呑み込む。途轍もなく大きな塊が、ゆっくりと咽喉を落ちて、途中で痞えるような嫌な感覚だけが残つた。

工藤は実に彼らしいと言うか、何事も無かつたような引き際を見せた。

「帰るか」

同期は残つたグラスのワインを飲み干す。僕もそれに倣うが、胸の痞えは降りなかつた。

冷めた料理はこれ以上咽喉を通りそうにない。

「そうだな」

僕らは中途半端に食べ残したまま、席を立つ。

誘つたから俺が払うと言つ同期に無理やり半分押付けて、僕は先に一人で店の外に出た。

ガラス扉の外で同期が勘定を済ませているのを待ちながら、改めてこの店を振り返つた。

心地よい店だが、僕は誰かを誘つてここにもう一度足を運ぶ気にはなれない。彼の告白ごと記憶から抹殺してしまいたい場所だ。

今更だけど、あの時の同期のきつかけの言葉まで、時間をリセッタできんだろうか？

僕らの関係が元に戻れるのなら、どんな事だつて僕はやつてみせただろう。何が何でも関本を誘つて、いつもの三人で、考えもなしに笑つて飲んで騒いでいただろう。

取り戻せない時間を儂んで、僕は大きなため息を吐く。

凍りついた冬の空に、吐く息が白く靄になる。思わず身震いしてしまつたのは、何も寒さだけではないような気がして、慌ててコートの襟をかき寄せた。

同期が出てくるのを確かめてから、僕は丁度路地を入つてきた夕

クシーに手を上げた。

今日はこのまま暗い夜道を一人で歩く気にはなれなかつた。

「タクシーで帰る」

開いたドアに、まるで逃げるように滑り込む。

ここから一刻も早く立ち去りたい。

僕を好きだと言つた同期を気持ち悪いとか嫌だとかは思わなかつた。ただ、落ち着かない状態のまま一人でいる事に気詰まりを感じるから、せめて今だけは一人になりたかつた。

「気をつけて帰れよ」

僕に向けられる気遣いに何故だか苛立ちを感じながら、運転手に行き先を告げる。いつもなら途中まで一緒に乗り合わせるはずなのに、今日はどちらからもその言葉は出ない。彼だって僕と狭い空間を共有するのは気まずいはずだ。

工藤は閉まる扉の横に、僕を見送るように立つていった。

顔を上げて『おやすみ』の一言ぐらいうべきなのは分かっていた。でも、僕にはそんな余裕すらない。

僕に断られた工藤がどんな顔で僕を見ているのか。そこに傷ついた様子を少しでも見てしまつたら、僕は明日からまたもに彼と顔を合わせることができないだろう。

タクシーは僕と工藤をゆっくり引き剥がすように発進をする。路地を抜けて角を曲がる時になつて、やつと工藤を振り返ることができた。車中の人となつた僕を見つめる仮想の視線を想像していたが、彼は僕など見てはいなかつた。

まるでスポットライトのように、彼に外灯が当たつていた。

少し俯き加減に地面の一点を見詰める同期の姿。

その表情が見える距離でもないのに、僕は彼が今どんな顔をしているのかさえ想像ができた。

後悔と失望。

リセットしたいのは、寧ろ同期の方かもしれない。

情けない自分の醜態に、僕は深い溜息と共にタクシーの後部座席

に身を沈めた。

同期の告白から一夜が明けた。今日が土曜日で、彼と顔を合わせなくて済むと言つことが僕には救いだつた。何も男に告白されたからと言って、いきなり世界が変わつてしまつわけでもないだらうが、僕にとってはそれこそ天と地がひつくり返つたようなものだ。どこか落ち着かないし、心がざわついて昨日はあんまり眠れなかつた。同じ告白でも、これが女性からなら僕はあんなに動搖はしない。例えそんなに好きでもない女の子に告白されたとしても、困りはするが震えるほど緊張するなんてなかつただらう。そう言つ意味で言えば、男に告白されると言つ事はとても尋常ではない体験だつたに違ひない。

なんとなく携帯が気になり着信を見たら、深夜に工藤からメールが一件届いていた。

これほど憂鬱なメールはない。

タイトルもないメールを開くにはどうしたつて躊躇するが、そのまま削除するわけにもいかず、僕は恐る恐る開いてみた。

『今日は付き合させて悪かつた。一課の会議資料は月曜にでもメールする。』

なんだ

なんとも素っ気ない内容に肩すかしを食らつた気分だ。何かを期待していた訳でもないが、メール一つだけでも動搖する自分が可笑しかつた。

そう言えは、火曜の会議資料。結局未完成のまま帰社してしまつたわけで、久しぶりに休日出勤をしてみようかと思い立つ。恐らく一、二時間で片付くだろうし、休日の方が余計な邪魔が入らず仕事は渉る。このまま家にいてもぐずぐず考えるだけだし、いつそ気晴らしに仕事でもして、その後どこかで優雅にランチでもどうだらう。僕はその思いつきに心を弾ませた。

休日なので僕は私服でマンションを飛び出す。

一階の守衛室に声を掛けると、既に僕のフロアは先客があるとの事。休日出勤は珍しい事でもなく、実際休日に稼動している部署もあつたりするので、僕は深く考えずエレベーターに飛び乗った。

僕の営業部は5階のフロア。

一人しか乗つてないエレベーターの箱は、途中に止まることなく一気に僕を引き上げる。階数表示のランプを見上げていた僕は、開いたドアに吸い寄せられるように足を踏み出していた。

でも、しかし こんな事つてあるのか！

いきなりエントランスホールに立つてゐる工藤と出くわした。

驚いたつてもんじやない。昨日の今日だし、告白された次の日にまさかのタイミング。自分の運の悪さを呪つたのは言つまでもない。情けないけど驚くほど動搖して、思わず身体が硬直したように立ち竦んでしまつた。

ある程度彼と顔を合わせる事を踏まえての心の準備も整つてゐる月曜日だつたら、僕ももう少し落ち着いた笑顔の一つでも捻り出していたのかもしれない。あまりにも突然のことで、適当な言葉さえ浮かばず、僕は当然のごとく慌てふためいた。血流が逆流して、真っ赤な顔になつたのが自分でも分かつた。

「一之瀬も休日出勤か」

工藤の方は僕の動搖を知つてか知らずか、實に涼しい顔でいつもと変わらない様子。

「会議の資料あとちょっとだから……いや、直ぐ帰るんだけどな」

当然会話もきこちなく逃げ腰の僕。正直、『回れ右』して帰りたいとさえ思つた。

「飲むか？」

工藤は手にした紙コップのコーヒーをちょっと上げる。エレベーターホールに自販機が並んでいて、工藤は丁度それを買ってデスク

に戻るところだつたようだ。

「朝飲んできた」

「やうか

ぎこちないままその珈琲の香りに引き摺られるようにして歩きだす。

工藤の服装も休日仕様で、そう言えばそんな彼を見るのも久しぶりだ。

モデルのようにスタイルが良いと、普通のジーンズをえどこかのデザイナーズものじゃないかと思える。彼の場合は実際そうだったりするから、迂闊に知ったかぶりもできない。

軽く腕まくりした手首にパシャの時計がチラリ。あれは僕も分かるけど、手が出せない代物だ。昔から工藤はさり気なく良いものを身に付けている。大して変わらない給料で、どこでこの差が出るのか謎だ。僕の場合はほとんどが飲んで食つて、お腹の中に入れて消えてなくなるんだろうな。

「じゃあな」

僕がお互いの懐事情をほんやりと考えている間に、工藤は手前の人から中へ入る。

僕はもごもごと返事をして、もうひとつ先のドアへ向かう。同じフロアだが、工藤の席は僕の出入りしているドアとは違つて手前の人アが近い。

机に向かうと、当然視界の隅に工藤の姿が映る。生憎今日の休日出勤は一人だけだし、どうしても彼の存在を意識する。僕を好きだと言う男と一人きりだと思うだけで、なんだか落ち着かない。パソコンに向かい仕事をしているようでも、常に心の半分を無言の同期の存在感に脅かされていて、なかなか集中ができない。

無理にでも意識を仕事へと向かわせているうちに、何時の間にか時間を忘れる位に作業へ没頭していた。夢中になると周りが見えなくなるのは昔からだ。

首の凝りを解して伸びをする。ちらりと視界の隅で、工藤がやは

りノートパソコンを閉じるところだった。

あいつ、見てたんじゃないのかと、変な勘ぐりもしたくなる。

「終わったか

遠くから彼が声を掛けてきた。

「ああ

僕もパソコンの電源を落として閉じる。

工藤はコートを掴んで僕の傍まで来ると、車のキーをチャラリと鳴らしてみせた。

「送るよ

本当は遠慮したかった。昨日の今日で車は密室だし、僕はかなり

妄想大魔王になっていた。

それが顔に出ていたのだろう。工藤は唇をスッと上げて笑う。

「襲つたりしないから安心しろ

なんとも物騒な事を言つて僕をびびらせた。

工藤の車はシルバーのBMW。サラリーマン三年目でこんな車を乗り回しているのは、僕とは違つてもともと恵まれた環境に育つた人間に違ひない。

僕は未だに自分の車は持つていいし、その必要性もあまり感じない。通勤は電車で充分だし、買い物だって徒歩圏内にあるスーパーで事足りる。滅多に乗らない車の為に維持費を掛けるのも勿体ないし、第一、車だと飲めないじゃないか。お酒好きの僕にはそれが一番辛い。

そう言えば、女性は運転する男性の何気ない仕草にドキリとするらしい。例えば車をバックで入れる時にさり気なく助手席側に手を乗せて、振り返りながらハンドルを切る仕草が色っぽいとか。

果たして彼もそうだったりするんだろうか？

工藤ほどの男なら、さぞかし女性はキュンとするんだろう。そんなバカな想像をしてしまう僕は、昨日の告白でなんだか可笑しくなつていたのかもしれない。

「少しどライブでもするか」

断る理由は何も思い当らなかつた。今日は休みで明日も休み。

僕は素直に頷いていた。それにこんな時でなければ、こんな高級車にはなかなか乗れない。僕も男だから、単純に将来こんな車に乗つてみたいと思つたりした。

「たまに走つたりするのか」

工藤はチラリと僕を見て、唇だけ上げて笑つてみせる。

「そうだな、煮詰まつてくるとドライブするのが一番かな。いろんな事考えて、独り言呴いて、家に戻つたら結構スッキリとする」

「へえ、おまえでも煮詰まる事あるんだ」

「意外だつたか？ 今朝は思いつきりそんな気分だつたよ」

それは俺のせいか。

喉元まで出掛けた言葉を呑み込む。同期に特に変わった様子はないが、彼は彼なりに昨日の告白について、考へることがあつたんだろう。

僕だつたら告白してフラれた翌日、とてもこんな風には話が出来ない。

「昨日、眠れたか？」

それなのに、まるで僕を気遣つよつてそんな台詞を口にした。

「速攻寝たよ」

流石に本当の事は言えない。

「そうか」

同期は微かに笑う。

「おまえは？」

僕は彼の横顔をこつそりと盗み見る。

彼は何を考えているのか暫く黙つている。

「言つてもいいか」

そんな前置きをされると、僕は少しだけ警戒をする。昨日の今日で、工藤が何を言い出すのか十分想像できるからだ。ここが車内で、他人に聞かれる恐れがないのが幸い。

「聞かなかつたことにするんじやなかつたのか」

僕なりに最新の注意を払つてそう言つた。

「そうだつたな」

工藤はそのまま黙り込む。そうなると、車内はなんだか居た堪れない空氣に支配される。もともと我慢強くない性格の僕は、自分から墓穴を掘る。

「俺が考え方を変えるとか期待するなよ」

「俺は一之瀬をどうしたいんだろうな」

工藤は自嘲気味に笑う。

そんな事を笑いながら言われても、僕はどうしたらいいんだ？

「おまえ俺に触れたいって言つたよな。それって抱きたいって事なのか？」

自分で言つてその生々しさでアドキリとした。SEXしたいのが、と言わなかつただけましだ。

彼は僕の一言で暫く考え込む。考へるつてことはやうなのかと、撲は内心穏やかではない。

そのせいで狭い車内は沈黙に包まれ、僕は嫌な汗を搔く。なら、あんな事を言わなきやいいのに、と今更ながら自分を責め続けた。

「おまえ相手にたつと思つたか？」

工藤は平氣でその台詞を口にする、からかうようにニヤニヤと僕を見た。

だから、そう言つ事を俺に聞くな！

僕がすっかり絶句してしまつと、工藤は少し眞面目な顔をして前を見据えた。

「そう言つたことがしたいわけじゃないんだ。ただ、友達と言つだけでは片づけられないものが今の俺にはあるらしい。おまえさ、友達としての好きじゃなければ何だと思つ？」

こきなり抱く、抱かない、の話になるのはもちろん困るが、だからと言つて僕にそんな質問をされても返答のしようがない。

そう思つてゐるうちに彼はまた喋り出す。

「例えば、関本だつて同期で友人だし、好きには違ひないだらう。ただ、一之瀬に対するよつた感情とは明らかに違う。俺は一之瀬を独占したいと思うし、ただ友達とつうだけでは満足できないんだ。おまえにとつては迷惑な話だらうな」

男が好きなわけでもない僕が、迷惑じゃないつて言つたら嘘だ。ただ、ここですつぱりとそう言つて、彼を傷つけてしまうのが怖い。いや、そのことで自分が悪者になる潔さが僕にはないだけかもしれない。

だから僕は辛抱強く、彼に説得を試みた。

ここは密室だし、彼はハンドルを握つてゐるし、どうしたつて僕は慎重になる。

「好きつて言つ感情は僕だつてなんとなく理解できる。おまえが本

来、男が好きってわけじゃないなら、それは独占欲みたいなものじゃないのか。ほら、思春期なんかにさ、そんな風に感じる事あるだろ？。友達でも最上級に好きな奴。そいつが誰かと仲良くすると嫉妬するし、自分が一番じゃなきや嫌だつて思うことあるだろ？。おまえはさ、そう言つ風に俺を見てるんじゃないのか。なにも、男が女を好きになるような、そんな対象として俺を見ているわけじゃないだろ？」「うう

工藤はチラリと僕を見る。そして又暫く黙ってしまう。

この沈黙はかなり重苦しくて、この状況を作り出している工藤が恨めしくなった。

車はいつの間にか高速に乗っていた。エンジンの回転する音で車が鞭を打つたかのように加速する。少しスピード出し過ぎじゃないかと思うのは、気のせいだろうか。

果たして彼は今何を考えているのだろうか。

僕の説得になるほどと思つてくれただろ？

それともこのまま自棄を起こして、車ごとどこかに突っ込んだらなんて、物騒な思いつきが頭をかすめてはいないだろ？

そうなつたら、多分僕らは死ぬんだろうな。

きつと、痛いなんて思う間もないだろ？。

僕は思いつめたように「一人が奈落の底に突っ込んで行くような、マイナスのイメージばかりを思い描いていた。だから彼が突然、「お腹すいたな」と言う全く違つた発想の言葉を吐いた時、僕はボランと彼を見つめて、その後急に可笑しくなつて笑い出した。

そう言えば、朝から何も食べてない。

「お腹空いてたら、碌な考えが浮かばない。どつかで飯でも食うか」

工藤も笑いだし、張りつめたような空気が一気に和らいだ。

僕らはその後、彼が一度だけ行つて忘れられないと言つ薺麦屋を探し回り、遅い昼食にありついた。

僕はなんとなく、それ以上彼の好きの正体を突き止めよつとする事もなく、最近どんな本を読んだとか、どんな音楽を聞くだとか、

他愛もない話で盛り上がった。

考えたら入社して三年、僕と彼の間に二人きりで過ごすこんな時間はなかつたと思う。彼が僕を好きだなんて言わなければ、これら先だつてもつと深い絆の友情を築く事ができたはずではないだろうか。彼はどうして、僕に嫌われるかもしれないと言つリスクを犯してまで、告白なんてしたのだろうか。彼くらい頭の良い人間が、そこに気がつかないわけがない。

たとえば関本ではなく彼が僕と同じ課に配属になつていたら、きっと彼は関本に嫉妬する事なんてなく、僕に告白をする事もなかつたのではないかと思つたりする。頼りない僕が頼りにするのは一番身近な工藤で、そんなポジションに彼はそれだけで満足したのかもしれない。そのちょっとした運命の掛け違いで、僕らは今振り回されているのではないだろうか。

元来た道を辿つて、僕のマンションに辿りついたのは夕方ぐらい。昼間の興奮が冷めると、多少疲れもあつたのか、僕らはすっかり無口になつていて。運転を任せていた僕としては、そのまま帰つてもらうのは申し訳ないと言つ思ひで、「珈琲でも飲んで行くか?」と、気軽に彼を誘つていた。

これが男と女の場合、家に誘うと言つ事はどこかに暗黙の了解がある。単純な男の発想かもしれないが、この時誘つた僕に彼がなんだか戸惑いを見せるから、どうしたんだろうと考えて、その発想に辿り着いた。

まさかとは思うが、彼は僕に触れたいと言つていた男だ。  
その言葉の重さに、僕は今になつてうろたえる。

「少しだけ」

そのまま走つて逃げよつかと思つていてる間に、工藤は既に決断していた。僕は今さらながらに自分で掘つた穴に落ちるような、情けない男と成り果てていた。

「久しぶりだよな、家に来るの」

出来るだけ平静を装つてエレベーターを待つ。実はこの時からジワジワと緊張が始まつていた。階数を表示する数字がゆつくりと1階へ降りてくる。気の利いた台詞も言えず、見上げる状態がなんとも気まずい。乗つたら乗つたで、窓もない小さな箱の中では閉所恐怖症にでもなつたかと思うぐらい息が詰まりそうだった。それに僕に触れたいなんて言う男と一人きりだと思つと、どうしても平静ではいられない。

こんな精神状態で、彼を僕の部屋に入れても大丈夫なんだろうか。僕の背中は真後ろに立つ工藤の存在にピリピリとする。エレベーターの中にはカメラもあるし、彼が僕に何かするとは思わないが、すっかり神経質になつていた。

4階のライトが消えると、僕は何時ものクセで『開』のボタンを押して、中に乗っている人間を先に降ろす。サラリーマン生活で身に着いたマナー。狭い箱の中、彼が僕の脇をすり抜ける。おしゃれな工藤らしく、透明感のあるフレグランスの香りが僕の鼻を撻る。それだけでも、妙にドキドキするものだ。

僕の部屋はエレベーターを降りて突き当たりの角部屋。何度か訪れた事のある工藤は、僕を待つ事もなく先を歩く。ため息ひとつ。

なんだか項垂れたまま後をついて行く。

突然、工藤が足を止めた。それこそ警戒心全開の僕は、ぶつかりそうになつて必要以上に驚いた反応をした。

「な、なんだよ」

ビックリ箱でも開けたような驚き方だつた。

そんな僕にちらりと先を促す。僕の部屋の前で携帯電話を耳に当てる佇む人影があつた。

同時にポケットの中で僕の携帯電話が暴れ出す。それを取りだす前に、人影の方から先に僕らに気付いた。

「なんだ、おまえら」

明るく届託のない声が聞こえて、携帯電話が鳴り止む。念の為に取りだしたディスプレイには『関本』の名前を確認。僕は何だかホッとしてそれをポケットに滑り込ませた。

「休日出勤したら一之瀬もいて、ここまで送つてきた」

工藤はいつもの感じで関本に歩み寄る。

「工藤もいるなら丁度いい。実家から美味しい肉送つて來たから一緒にどうだ?」

手にぶら提げている箱を掲げる。

「神戸牛か」と工藤。

「美味しいぞ」

関本が二コリと笑つた。

結局、僕らは三人で鍋を囲む事になり、関本と工藤は車で買出し

に出掛けた。僕は部屋に戻つて仕舞つている鍋を取り出し、結婚式の引き出物に貰つた小鉢を洗つたりして、今晚の宴会の準備をする。

鍋なら当然飲むことになる。

工藤は車で来ているし、どうするんだよ、帰りは。

明日も休みだし、泊まるんだろうな、やっぱり。

それってかなりやばくないか？

飲んだら乗るな。飲むなら乗るな。

交通標語が僕の頭の中をグルグル回る。

小一時間もすると、二人は両手一杯の荷物を抱えて帰ってきた。  
何人分だと聞きたくなるぐらいの買い出し量だ。

「スーパーで追加の肉買って来た。食べ比べてみようぜ」  
パックに入った肉が積まれる。もちろんビールは欠かせない。買  
い置きもあったので、さつき冷蔵庫に放り込んだ。

白菜、葱、椎茸、春菊、糸コンニャク、焼き豆腐、卵。  
どうやらすき焼つて事らしい。

「なんだ、これ？」

「ふ

「ふ？」

「おまえ、すき焼に『ふ』は欠かせないだろ？

当然のように関本が言い放つ。

「関本がこれは絶対に必需品だつて譲らないんだ。一之瀬、『ふ』  
なんか入れるか？」

工藤はなんだか納得いかないよう『ふ』の入った袋で撲を指す。  
「お味噌汁とかに入つてたつけ。そういうや『ふ』つてあんまり食べ  
た事ないな」

「だろ？」

ここで僕らは、『肉まん』と呼ぶか『豚まん』と呼ぶか、醤油党  
かソース党か、そんな他愛無い話で盛り上がる。

狭い台所に男が三人も立てないので、僕と工藤はほとんど関本に  
お任せ状態。

僕は遙か昔に自炊をすっかり諦めているので、社会人になつた時  
に取り敢えず揃えた包丁も箱に入つたまま、新品同様な状態で何処  
かの引き出しに収まつてある。

僕の独り暮らしなんて、キッチン挟み一つあれば事足りる。

インスタントラーメンの袋を切るから始まり、葱だつてそれで刻

んだりする。

関本は引き出しや扉を勝手に開けて、包丁やらまな板やらを探し出し、手際よく準備を始めた。まあ、言つてみても鍋だから料理するって程でもなく、切ればなんとかなる。

工藤は灰皿片手に煙草を銜えながら、少し後ろからそれを眺めていた。

「おまえ、嫁にいけるぞ」

そう言つ工藤に、関本は振り返つて笑う。

「惚れるなよ」

そんな軽口を言つて、一人を眺めて、僕は少しだけホッとする。

関本に嫉妬すると言つた工藤。

二人の間がこれまでと違つたものになる事を何よりも僕は望まない。

昨日の告白のせいで、工藤が関本を反目するようになつたら悲しい。このままの状態で、僕に対する好きが、少しだけ行過ぎた独占欲だつたと思い直してくれるのが、たぶん一番好事だと思つ。仕方なく僕は反対側に一人で座る。

見るとも無しに着けているテレビは僕の背中。

正面にこの二人を視界にいれる事に少しだけ抵抗を感じた。やはり僕はどこかで工藤と関本を意識しているからかもしない。

缶ビールで乾杯をして、鍋が出来るまでにと買って来たお惣菜をつまむ。

関本は関西人なので、ワリシタを使わず、醤油と砂糖とお酒で鍋を作る。僕はいそいそと卵なんかを割つたりしながら、食べる準備に入る。

そう言えば関本つて関西弁があまりでない。大学4年間ですっかりバイリンガルになつたとほざいていた。

工藤は本当の意味でのバイリンガル。帰国子女で英語には全く困らない。

将来、海外勤務も夢でない男だ。

そう言つ僕は極平凡な男。関西弁も英語も話せない。

こんな僕の何処が良いのか分からぬ。

「まずは行くぞ、スーパーの肉」

と、言いながら僕の小鉢に関本が肉を取り分ける。そう言えど、いつもこんな風に世話を焼かれるが、これが案外工藤をやきもきさせる原因じやないだろうか。

お願いだから今日は自分の好きにさせてくれ。

こんな状況を工藤がどう思つてゐるのか。

そこが気になる僕は工藤の顔がまともに見られない。取敢えず、小鉢の肉にがつつく。

独身サラリーマンにはスーパーの肉でも、十分な贅沢品だつた。

「いくぞ！ 神戸牛」

やつぱり美味しい。僕らは大絶賛。

関本拘りの『ふ』がまた絶品だつた。肉の旨みが滲みこんで、とろとろとして、火傷しそうになりながら僕らは其れを食べた。

三人の話題はもっぱら仕事の話になる。サラリーマンなんだな、僕らは。

今期も残り少ない。営業マンの僕らは予算をクリアできるのか、今之所それが大命題。

明日は休みだと思うとビールもすすむ。当然、僕は酔つ払う。

「工藤、知つてるか？ 一之瀬のやつ」

関本が突然思い出しそうに肘で工藤を突きながら、そんな事を言い出した。

「なんの話だよ」

僕は全く警戒心なしで、片肘ついたとろんとした眼でビールを飲

みながら関本を見る。

「おまえさ、昨日は『デートなんだら』」

飲んでいたビールを噴出す。

「隠し事できない奴だな」

関本のニヤニヤした顔と、涼しい顔で煙草を吸う工藤を交互に見比べた。

「そうだったのか？」

なんて言いながら、工藤は惚けた顔で煙草をふかす。

「ばつ……なわけないだろ？」「

テーブルの上の粗相をティッシュで拭きながら僕は焦る。

「白状しろ、一之瀬」

関本も煙草を銜える。工藤が火を差し出すと、ちょっと俯きながら煙草に火をつけて、チラリと追い詰めるように僕を見据えた。

なんなんだ、一人して。工藤、おまえ何とか言えよ。

いやいや、やっぱり言わなくていい。

僕はこの展開にやたら焦り捲くる。

「一之瀬に彼女がいたっておかしかないだろ？」

工藤が唇を上げて意地悪く笑う。

おまえもそう思うのなら、諦める。

大した効果はないだろうが、僕は工藤を睨みつける。

「俺はね、こいつに彼女ができるのが面白くないんだよ」

この発言に僕は驚く。こう言つたのが工藤だつたら昨日で充分な下地があつただけに、僕はまだ納得できた。いや、やっぱり納得はできないけど。

この台詞を口にしたのが関本だったのが意外だった。

「なんだよ、それ」

工藤も関本をチラリと見る。真横の関本には見えないが、ちょっと怖いぐらいの視線に僕はハラハラとする。

「一之瀬はさ、ずっとこのままで居て欲しいんだよな。ん……これつて変か？」

関本は銜え煙草で工藤を見る。

「よく分からないな」

工藤は少し難い表情をした。

「こいつ不思議と庇護欲操るだろ。俺はね、どつかの女に取られるのが嫌なんだよ」

おいおい関本、おまえもか。

「大事な娘を嫁にでも出す心境か?」

工藤が顔を背けるようにして煙草の煙を吐く。

「ま、そんなもんかな」

関本は咥え煙草で器用に笑ってみせた。

「何、勝手な事言つてんだ」

「嗜虐心を操るつて言われるよかマシだ」

関本はケラケラと笑つてビールを飲む。

たぶん飲みすぎだ、こいつ。

「可愛いんだよな、おまえ」

関本は立ち上ると、僕の前髪をクシャクシャにしてから『トイレ』と宣言して姿を消す。

なんだろう、僕はそんなに男に好かれるタイプなのか。

僕の25年の歴史で、同性に告白されるなんて事は一度もなかつたし、「一々瀬、男に好かれるだろ」なんて指摘も受けた事はない。

むろん昨日までは。

こんなに男にモテモテで良いものだろつか。

誰にでも人生のうちで、最高にモテ期と言つのがあると聞いた。まさか、これじゃないよな。

そんな事にただ一度のチャンスを今使つていいとしたら悲しい。それも男相手に。

「俺の妬きもちも、まんざら的外れでもないってことか」

工藤が自嘲するように笑うから、僕は居たまれなくなる。

自分で言つのも変だが、関本の場合はどうぢらかと言つと保護者の感覚じゃないかと思う。それでも、あの発言はメガトン級の爆弾のような威力があった。

その張本人が涼しい顔でトイレから帰還すると、「一度片付けるか」と洗い物を始める。

「の男は思つたら即行動だから、僕も慌てて鍋や汚れた小鉢を運ぶ。

「おまえらは座つていいぞ」

関本は動く事が億劫ではない男だ。

僕は仕方なくテレビの前に戻つて、内容なんて全く分からない画面を斜に見る。工藤はあれから全くしゃべらない。キッチンに関本がいるとは分かっているが、僕らを包む空間は、それは、それは、居心地が悪いものになつた。

どうすんだよ、この空氣。

「酔つたのか？」

なにか話しかけなければならぬ「ような気がして、僕は工藤を見る。

「いや」

僕を見ようともせずに、壁に凭れたまま足を投げ出して腕を組みながら煙草を吸つてゐる。関本の発言を反芻しているんだろうな、きつと。

「の状況はあまり好ましくない。冗談だとは思うが、関本が僕を可愛いと言つたのは事実で、それによつて工藤が嫉妬をする。せつかくどこかに落ち着かせようとしたやつかいな感情が、関本の不用意な一言でまた噴出したわけだ。

工藤は今必死になつてゐる。

「めん、僕にはどうにもできない。

適当な言葉も、この場の雰囲気を取り繕つ術も浮かばないから、ただひたすらテレビに集中したふりで遣り過げす。

「之瀬、酒置いてないのか？」

台所で関本が「ごそ」をしながら物色をしていく。

「ビールしかないよ」

僕は膝を突いた姿勢で台所に身体を乗り出しながら、関本に声を掛ける。

「ビールは腹いっぱいを感じだな。俺の部屋から取つておきのウイスキーを持つてくるか」

「俺、そんなに飲めないからいいよ」

「アホか、俺が飲みたいんだよ。工藤も飲めるだろ」

そう言つと関本はバタバタと廊下を走つて行く。

バカ、一人きりにするなよ。

玄関に消える関本を見つめて、がっくりと肩を落とす。

その時視界の隅で影が動いた。なんだろうと思つた途端、僕は後ろから工藤に抱きしめられていた。

「一之瀬」

あの囁くような声で僕の名前を呼ぶ。切羽詰つたその声に僕は身体が竦んだ。こんな事があるかもしれないと最初に警戒はしていたが、すっかり気が緩んでいた。

彼の顔が僕の首筋に埋まる。ゾクリとする感覚。

一瞬だけ彼の唇が僕に触れたかもしない。でも錯覚だったかもしないと感じるぐらいの、微かな感触が僕の首筋をチクチクとさせた。

関本も戻つてくるし、これ以上の振る舞いを彼がするとは思わなかつた。それ位の信頼関係はまだあると信じたい。そんな思いで、廻された腕にそつと触れた。

「関本、帰つてくるぞ」

意外と冷静な声が出せた。

「そうだな」

彼もゆつくりと腕を解く。

「気が済んだか」

僕は顔さえまともに見られず、背を向けたままだった。

「やつぱり男なんだよな」

苦笑ともとれるような微かな笑いが悲しげに聞こえた。

「分かつただろ、これで。それでもまだ俺に触れたいとか思うのか」

工藤の気配が真後ろから消える。僕は緊張した身体をゆっくりと解くと、両手をついてそのまま振り返って座り込む。

工藤はまるで何事もなかつたかのように壁に背を凭れた状態でそこにいた。

火のついたままの煙草を灰皿から取り上げると、深く吸つて遠くへ吐きだす。

「まいったな、俺にはこいつ言つことも普通にできるらしい」

白い煙越しに僕を見る。

「こんな事はやめてくれ

彼は、悲しい眼をした。僕の一言が彼を酷く傷付けたような気がして、胸が詰まる。

「おまえを困らせてるんだろうな。それは分かつてるんだ」

そんな事は百も承知だと言う顔で辛そうに僕を見る。彼は今友達の境界線を日々と越えてきた。僕がその一步を許してしまったのか。不用意に車に乗つて、不用意に家に上げるような状況を作るべきではなかつたのかもしれない。

唯こんな事があつても、僕は工藤と言う友人を失いたくない。それだけは確かだ。

このまま友人であり続ける事はそんなに難しい事なのか。工藤が越えてきた境界線は、僕にはとても越えられそうにない。

その夜、二人は僕の部屋に泊まつた。かなり飲んでいたし、僕らの宴会は深夜まで続いていたから、それから工藤が車を運転して帰るのは不可能だつた。

実は、途中からあまり覚えていない。とにかくあんな事があつた以上は、飲まずには居られない精神状態だつた。

関本が持ち込んだウイスキーは、名前は知つてゐるが飲んだ事もない高級酒だつた。喉が焼けることも無く、危ないぐらいにスイスイと飲めてしまう。

半分自棄酒に近かつた。

酔つと僕がどうなるかと言つと、かなり陽気になつてしまつて倒し、拳句の果てにはどこにでも寝てしまつ。

気がついた時は自分のベッドだつた。どうやつてそこまで辿り着いたのか記憶にはないが、服を着たままベッドに転がつていた。

時計を見ると、明け方の5時。

着ていた服を脱ぎ捨て、Tシャツとパンツ一つで、もう一度睡眠を貪る。僕の頭には関本と工藤がどうなつたかなんて、全く考えが及ばなかつた。

起き出したのは7時過ぎ。どんなに遅くまで飲んで帰つても、だいたいこの時間には眼が覚める。

ベッドを抜け出し、ドアを開けると、台所に誰かの気配。

「おはよう」

そう言つて振り返つたのは工藤だつた。ゆつくりと記憶が戻つて来る。

「関本は？」

「もう一度寝直すつて今さつき帰つて行つたよ。勝手に毛布借りたけど

「寒むくなかったか？」

「一緒に寝るつて手もあつたんだけどな」

工藤は一ヤリと笑う。そんな風に言えるだけどこか吹っ切れたんだろうか。起きぬけのぼおつとした頭には、この際どい会話を現実味をもたない。

「笑えない冗談だな」

あぐびと共にぼつりと弦く。

「そうだな」

工藤はクスクスと笑いだす。

僕は一日酔いの常で、頭も身体もほぼ休止状態。

「一之瀬、シャワー浴びたらどうだ？ その間に珈琲入れておくから」

「そうする」

あんまり知恵の回らない頭で風呂場に行き、何も考えないままシャワーに頭を突っ込んだ。

少しづつ頭がスッキリとしてくる。

どうやら昨晩は彼が夜這いを掛けることもなく、僕は貞操の危機には至らなかつたようだ。

さて、どうしたもんかな。

シャワーの下であれこれ、考えに耽る。

そして、結局は僕が考えても仕方がない事だと思った。僕のスタッフはあくまでも同期であり友人であり、それ以上でも以下でもない。

だから、彼が自分の気持にどう折り合いをつけるか。

僕はできるだけ今まで通り、普通に接するしかないだろう。

この普通つて事が不器用な僕には結構難しい。

シャワーを浴びて幾分頭がスッキリすると、あられもない恰好で彼の前に現れるのはまずいと言つ意識も働きだす。さつきは結構際どい事をしていたのだと気が付く。

僕は風呂場からバスタオル一枚で、こそ泥のようになベッドルーム

へ駆け込む。取り敢えずスウェットの上下を来て、バスタオルを首に引っかけて、台所に戻る。

僕の家の台所は4畳ぐらい。冷蔵庫や食器棚。弁当をチンするのに大活躍のオーブンレンジなんかが置いてあって、一人用の小さな珈琲テーブルぐらいしか置けない。

彼がそこへできたての珈琲を置くから、僕はそこへ座る。もちろん彼も向かいに座るわけだ。

この距離、結構デنجヤラスゾーンだと思う。

珈琲を一口啜つて何気に彼を見つめる。

なんか一夜明けた恋人同士のようじゃないか。

僕はまたそんな愚かな考えに捉われ始める。見つめあつたりしたら危ない。

慌てて視線を逸らす。

「ちょっとはスッキリした顔になつたな

「そんなに酷いか？」

彼は唇を上げるあの笑い方で僕を見る。あんな状態で雑魚寝をしたとは思えないぐらい、いつもの清潔感溢れる彼がいた。僕は逆光になつた彼を少し眩しい眼をして見つめた。

ひらりと彼の手が伸びる。

僕は一瞬息を詰めて固まる。

彼の手は、まだ湿つたままの僕の前髪にそつと触れた。

「柔らかいんだな」

僕の髪の感触を確かめるようにくしゃくしゃと掴んでから放す。

これは友人として有りか否か？ 僕は自分に問いかける。

決して、僕が嫌悪するような行為ではなかつた。それでも好きだと告白した彼には、どこか意味のある触れ方だと思わずにいられなかつた。

僕はいちいちそんな事を考えながら、これからこいつと付き合つんだろうか？

なんて、やつかいな関係になつてしまつたんだろう。

「一之瀬、そろそろ散髪いけよ  
彼はそう言って立ち上がった。

「帰るよ

「うん

引止めはしない。僕は十分疲れている。

こいつが帰つたら、もう一回寝直すつもりだ。

「いいよ、カップは洗つとくから」

「悪いな」

彼は玄関に向かう。

僕も一応お見送りでその後について行く。

「ここでいいよ

「下まで行くかよ、バカ」

なんとなく憎まれ口を叩く。

狭い玄関で工藤が体を屈めて靴を履く。気を利かせたつもりでそのままから身を乗り出して玄関の鍵を開けてやる。

これは本当に、出会い頭の事故のような状況だった。

たまたま彼が立ち上がり振返ると、僕が扉から身体を戻すそのタイミングが悪かつた。ちょっとぶつかりそうになり、僕らは同時にドキリとしてその場に凍りついた。

人は常に、他人と一定の距離を持つて接している。赤の他人が必要以上に近付いて着たら、危ない奴だと警戒する。友達の距離、恋人同士の距離。それに照らすと、この状況は僕にとっては警戒に値する距離だった。だから僕は必要以上に緊張した。

今までだつて、彼ともつと近くに寄り添つた経験がないわけではない。たとえばパソコンの画面を見つめて、肩越しにそれを覗くとか。飲んだ帰りにうつかりと寝込んで彼の肩を借りるとか。

でも、それは彼を友達だと思うからできていた事であつて、彼の気持ちを知つてしまつた今は、その距離の近さは僕にとっては危険な領域だった。

どうして彼の眼を見てしまつたのだろう。僕は後々もその事がず

つと悔やまれた。まるで眼を逸らした方が負けだと言つよつに、彼も僕をじっと見るから、真剣勝負の侍のように膠着した状態になる。決していきなりではなかつた。逃げようと思えば逃げられるだけの時間はあつたと思う。その証拠に、彼はゆっくりと僕に近付いて來た。

あ、來るな。

頭の片隅で、彼が僕に何をするのか当に気がついていた。

僕らの周りの時間がゆっくりと流れる。人間は危険と直面すると、それから回避したいが為に時間の感覚を遅らせる事が出来るのかもしれない。

最初に感じたのは彼がつけていいるフレグランスの香り。息をするのも忘れた唇に、ひんやりとした少し湿っぽい彼の唇が触れる。その瞬間、僕は眼を閉じてそれを許していた。

触れるだけのぎこちないキス。

その感触より、撲を包み込む彼の香りの記憶の方が鮮烈だった。男と始めてのキス。

僕の頭はからっぽになる。

ブルーマンデー。

サラリーマンにとつて月曜の朝は憂鬱だ。ただでさえそうなのに、僕は大きな十字架を背負っている。

昨日、男とキスをしてしまった。相手は同期で、友人で、しかも同じフロアで仕事をしている。酔つた勢いとか、罰ゲームの類でもない。

彼は僕の事が好きだと告白し、僕は聞かなかつた事にするつもりで、週末のあの夜の告白を消し去らうとした。でも、どうしたって僕にそんな器用な真似ができる筈もなく、忘れてくれと言つた本人だつて、多分戸惑つている。

あのキス自体は、本当に偶発事故のようなものだつたと思う。触れるだけの、それこそ中学生のようなキスだつたし、たまたま至近距離に僕の顔があつて、逃げ出す素振りも見せないなら、好きだと告白した相手にとつては、それこそチャンス到来だつたろう。実際僕は逃げなかつたし、キスされても相手を突き飛ばすとか、顔を背けるなどの拒絶もしなかつた。

彼は多分、僕がそうするであろうと、最初から分かっていたうえでの、あの行動だつたと思う。あの眼を見た瞬間、僕は逃げることをどこかで諦めていたし、彼とのキスを予感していた。

同性愛者でもない彼が、僕を好きだと言う感情が理解できない。男が好きなわけではなく、僕だけを好きだと言う彼の想いは、もしかしたら究極の友情みたいなものだらうか。彼ほどの男にそんな風に思われる自分は、もつと素直に喜んでいいのかも知れない。それなら何故、彼が僕をここまで焦せらせたり、滅入らせたりするのか。

彼の想いが搖るぎないもので、そんな究極の友情なんつもに目覚めたとしたら、それは素晴らしい事に違いない。唯、彼は好きが

高じて、抱きしめたいとか、キスをしたいとか思い出した。事実、彼はそれを易々とやつて見せた。

その先に何が待つているのか？

考えたくはないが、やっぱり肉体関係つてことだろ？。  
確かに彼は僕に触れたいと言つていた。いきなり僕をどうこうしたいと言つわけではなさそうだが、抱きしめたりキスしたりはできるようだ。

これだけだつて、十分ハードルの高い事だと思う。  
だいたい、友達同士でそんな事はしない。だから、彼は僕の事が異性を好きになるような感情なのだと益々思い込む。  
もしかしたら、僕を抱いたらどうなんだろうかと、既に思い始めているかも知れない。

たかがSEXぐらいと思つかもしないが、その一線を超える事は容易ではなく、少なくとも僕は、男相手にそれができるとは思わない。

なのに今の彼は、そんな不毛な事でさえできるような気になつてないだろか。そんな彼の思い込みが、正直僕には脅威に感じる。

昨日は一日中、そんな悶々とした気持で過ごした。  
どうしたつて彼と顔をあわせなければならぬ月曜日は、僕にとつては限りなくブルーマンデーだ。

会社に着くと「会いたくない」と思う気持が通じたのか、工藤は朝一番のアポで既に会社を出ていた。考えたら彼だって僕に会うのは気まずいだろうから、できるだけ僕を避けたかったのかもしれない。

ホワイトボードの帰社予定は17時。それまでは社内は安全地帯と言う訳だ。僕はホツと胸を撫で下ろす。

朝のルーチンとしては、メールチェックの後、重要なメールへの返信、パソコンに貼られた伝言メモの折り返しの電話対応、今日のスケジュール確認、明日の会議の連絡網を廻す。取り敢えずはそんなどろか。

「おはよ」

ざつとメールに眼を通した所で、僕の机に関本が紙コップの珈琲を差し入れてくれた。

今朝はなんとなく、もう一人の同期と顔を合わせることに躊躇いを感じていたらしく、一人で早めに出社をしていた。

「おはよ。悪いな、朝コレが気になつて」

机の上の会議資料を、言い訳がましく指で指した。

「おまえ、土曜に出勤して出来てたんじゃないのか?」

相変わらず、鋭いところを突いてくる。

「課長に提出する前に、プリントアウトして確認したかったんだよ」

「ふうん」

関本の訝しがるような眼に、秘密を抱えた僕としては穏やかではない。視線を逸らす為に、机の珈琲に手を伸ばす。

関本の奢りの珈琲を有り難く頂きながら、会議資料に眼をやる。

「それはそうと、おまえ大丈夫だつたか?」

関本も隣で珈琲を啜る。

「大丈夫じゃないよ。」

関本が工藤を連れ出してくれば、キスなんかされなかつたさ。キスの一件を知るよしもない関本に、ちょっと恨めしい顔をして見せる。

「あんまり飲みすぎたなよ」

どこか心配げな表情で関本が僕を見た。そんな風に優しくされると、後半の記憶が全くなくなつてゐる僕は、突然不安になる。

「迷惑かけたか？」

「まあね」

そう言つて、関本はニヤリと笑つた。  
やつてゐるな。

記憶がないのは幸せなことか、不幸なことか。

「関本？」

「」いつ言つ時の関本は、タチが悪い。ニヤニヤと気持ちの悪い笑みをこぼす。

「なかなか可愛かつたぞ」  
最悪だ。

工藤を刺激するような事とかしていないだらうな。  
でなくとも、キスだぞ、キス。頭に過るキスシーンを僕は振り払う。

「可愛いって褒め言葉じゃないだろ」

僕が嫌そうな顔をすると、土曜日の酔つ払いふりを笑いながら説明してくれた。僕はそれを聞いて赤くなつたり、青くなつたり。ほとんど覚えてないのが我ながら恐ろしい。

酔うと雄弁になる僕は、やたら出会つた頃の三人の想い出話を口にし、いかに一人を同期として友人として、良い奴だと思つてゐるのか力説したらしい。拳句に、自分が男として不甲斐ないかとか、これだから彼女ができないとか、後半は愚痴つて絡んで手に負えないほどだつたとか。

関本の話からすると、自分が同期としてどうなんだ?と言う事をしきりに聞きたがつたようだ。その奥底には、工藤の告白がかなり

影響していたんじゃないだろうか。もう、穴があつたら入りたいとはこの事で、僕は当分お酒なんか飲まないと堅く心に誓いながら、苦い珈琲を口に含んだ。

「気にするな」

関本が励ますように僕の肩を叩く。この言い方は、完全なる揶揄だから、僕はますます渋い顔になる。

「俺は好きだよ、一之瀬が」

案の定、関本がニヤリと嫌らし笑みを零す。

「殴るぞ、おまえ」

僕は実際右手を繰り出し、素早く関本にかわされた。朝から大人がやる事ではないだろうに、僕らは隣同士で小競り合いを始める。

「関本、一之瀬」

課長に一喝された。これでは、まるで高校生じゃないか。

「おまえら、体力余つてそうだな。ちょっと手伝え」

拳句、模様替えの机移動に借り出される始末。

「関本のせいだからな」

懲りない僕はそれでもブツブツと文句を垂れる。関本は僕の髪の毛をぐしゃぐしゃとして、「はい、はい」と子供扱いだ。

「一之瀬、散髪行けよ」

図らずとも工藤と同じ台詞を吐いた。

同じように髪に触れて、同じようにその台詞を言われたのに、関本と工藤では全く違う。同じ同期で同じ友人なのに。

関本の行為には何の含みもないが、それに比べて工藤は僕を好きだと言う前提がある。僕に関するどんな事に対しても、これから先はどこかにその裏の意味を勘ぐつてしまつ。

ああ、またなんだか迷路に迷い込んだ気分だ。

「一之瀬、なんかあつたか?」

勘のいい関本が急にそんな事を言った。

「なんで」

ドキリとしながらも、僕は関本の顔色を窺う。

「なんとなくだよ」

そうだよな、流石の関本も、まさかもう一人の同期に好きだなんて言われたとは思わないだろ？。唯、何があると思わせるような気配を、僕から感じとっているのは確かだ。僕はそんなに分かり易い人間なのか。

ここで、関本に洗いざらいぶちまけてしまつたらどうだろ？。関本なら、興味本位ではなく真剣に相談に乗ってくれるはずに違ない。

僕は、関本の顔をじっと見た。ちょっと不自然なぐらいで長く見つめ過ぎたかもしれない。

「何もないよ」

結局、僕は自分の中に仕舞い込む。いくら関本でも、同じ同期に好きだと告白されたなんて、やつぱり言えるわけがない。女の子に告白されたのとは訳が違うんだ。

「そうか？ なにがあるなら俺に相談しようよ」

男前の関本らしい台詞で、僕は申し訳ない気持になる。

工藤はその日、帰社時間には戻らず、いつの間にかホワイトボードは『直帰』の文字に変わっていた。そうなると僕の心境は複雑なもので、なんだか避けられているような気がするし、又そうだとしたら「何でだよ」と実に身勝手な怒りが湧いてくる。

キスしておいて逃げるのか、責任とれよ、位の勢いで腹が立つてくる。

たかがキス。

されどキス。

それもほんとに唇を触れ合わせたぐらいの衝突事故みたいなキスなのに、何をこんなに腹が立つのか自分でも分からない。

工藤に謝つてもらいたいのか。

謝られたらそれはそれで、自分が被害者にでもなったような気がする。

結局、僕はどうして欲しいのか自分でも分からなくなつて、朝のブルーで落ち込んだ気分とは一転して、やたらイライラとする午後だった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8203x/>

---

同期

2011年12月31日16時54分発行